

「一茶等」「七評ちらし」の板木

永井一彰*

はじめに

平成二十一年十二月にマスコミを通じて発表した「一茶等発句合募句ちらし」の板木について報告しておく。

該当の板木は、奈良大学がここ数十年ほどの間に収集してきた京都の竹苞書楼・藤井文政堂旧蔵のものとは全く別に、数年前に京都の古美術店から単品で購入したものである。幾つかのダンボール箱に数十枚の風絵の板木が無造作につっこんであり、その中から探し出した一枚である。図Ⅰが風絵を彫った板木の表面、図Ⅱが裏面でこちらにちらしが彫られている。板木は整った長方形ではないが、概寸は縦290×横190×厚さ18耗。表面に彫られている役者絵風の図柄は風絵にしてはずいぶんと小さい。ちらしに使用された裏面四隅に彫りこみがあり釘穴らしきものが残る(図Ⅲ拡大図版参照)ことからすると、同様の板木を何枚か組み合わせてそれなりの大きさの風絵を作成したのだと考えられる。そもそも発句合のそれに限ったことではないが、「ちらし」

はその場限りのもので、元来残りにくい性質をもっている。当然その板木も、書肆が商品として長期に亘る販売を用途とする一般的な書物の板木とは異なり、ちらしの印刷が済めば不要となり、廃棄される運命にある。つまり、ちらしの板木は「残す」ことを前提に作られることはないのである。印刷された発句合のちらしは当時の投句者が手元に溜め込んだものが比較的纏まって伝わったような例が時々見受けられるが、ちらしの板木の残存例の報告がないのは偏にそこに起因する。この場合は風絵の裏面をいわば再利用してちらしを彫ったのであるが、風絵の板木としてまとめて残されたため、裏面のちらしもたまたま残ったのである。

さて、この板木、ちらしの板木の残存例として貴重な史料でもあるが、ちらしそのものもまだ知られていないもので、その内容を紹介しておきたいと思う。が、その前に、このちらしが伝える発句合興行と密接な内容を持つ『十評発句集』に目を通

しておくことにしよう。

十評発句集

富山県立図書館志田文庫蔵本によれば、『十評発句集』は半紙本一冊。原本を見ていないので色は不明であるが、国文学研究資料館提供の写真によれば、布目地表紙。表紙中央上部の無辺元題簽に「十評発句集 全」とある。丁付は「一〇十九」がノドに入り、終丁は丁付なし。一丁は冒頭に「十評発句集」と題し、次のような凡例がある。なお、以下の引用文中の句読点・濁点は私に補う。

北越浦佐多聞天奉納寄句四千百余喙の内、抜句一評より二十五吟宛、撰者の坐席前後、其懐紙至來の遅速にまかす。十評共に巻頭巻軸の称美あり。二番より二十四番まで甲乙句位、并の如し。但、通り点之部は六評より九評まで懐紙の帖順にまかす。五評已下之通り点は、数多故略之。

享和元年辛酉年仲秋 願主北越塩沢 楓館茂兮

補助 秋月菴牧之

続けて二丁表冒頭にやはり「十評発句集」と題して、二〇十九丁表に選句を収録。その内訳は次の通りである。

- 2オ 東都松露庵烏明撰 巻頭↓巻軸 二十五句
- 3ウ 浪速八千坊選 (表示無) 二十五句
- 5オ 洛東芭蕉堂蒼虬評 (表示無) 二十五句

- 6ウ 湖南義仲寺重厚選 (表示無) 二十五句
- 8オ 東都春秋庵其堂評 (表示無) 二十五句
- 9ウ 讃州邦子坊博和評 (表示無) 二十五句
- 11オ 東都千鳥庵杜春撰 (表示無) 二十五句
- 12ウ 神都梅月庵坡仄撰 (表示無) 二十五句
- 14オ 浪華不二庵桃居選 (表示無) 二十五句
- 15ウ 花洛一無庵丈左撰 (表示無) 二十五句
- 17オ 六評通点之部 三十二句
- 19オ 七評通点之部 三句
- 19オ 八評之部 三句
- 19ウ 九評之部 一句

続けて19ウ・20オに選者十名の「法楽」句を収録し、20ウに「蕉門書林 皇都寺町通二條 橋屋治兵衛」と刊記を入れる。以上を要約するに、この『十評発句集』は、北越塩沢の楓館茂兮が願主となり秋月菴鈴木牧之の補助を得て、北越浦佐多聞天（現新潟県南魚沼市浦佐吉祥山普光寺の毘沙門堂）奉納を名目に十名の撰者の点を乞い、その結果を享和元年仲秋に披露した冊子であったということになる。凡例によれば寄句は四千百余、それを十名の撰者がそれぞれに目を通して加点、その上位二十五番の勝句が撰者別に掲載してある。なお、冒頭の烏明撰の部には最初の句に「巻頭（特等賞）」の、末尾の句に「巻軸（二等賞）」の表示があるが、八千坊選以下の部にはそれが無い。が、凡例に「十評共に巻頭巻軸の称美あり」とあるので、巻頭・巻軸の表

示を省略しただけで、他も全て鳥明撰の部に準じて考えればよい。かように撰者が複数に及ぶ場合、同一の句が何人かの撰者に勝句として選ばれることはあり得るわけで、それが凡例及び選句の部に言う「通り点」の句なのである。つまり「六評通点」とは撰者十名のうち六人によって上位勝番に据えられた句、の意。「七評通点」「八評」「九評」も同様。収録勝句によって、そのことを検証してみよう。後で示す一覽表を見れば分かるように、この発句合で最も多く句が収録されるのは目来田の里竹で合13章。これに次ぐのが牧之の12章である。二人の句を撰者・項目別に次に取り出してみる。

〈里竹〉

鳥明撰

2才 つくくくと山見る秋の夕かな

八千坊選

4才 さびしさに戸もさ、ぬなり秋の暮

4ウ 見るものにうつりて秋の心かな

重厚選

7才 松明に草の骨すく寒かな

其堂評

8才 うた、寐のうつ、に動く団扇哉

8才 見るものにうつりて秋の心かな

杜春撰

12才 帰花咲て寂しき日和かな

坡仄撰

13ウ 淋しさに戸もさ、ぬ也秋の暮

丈左撰

16才 寂しさに戸もさ、ぬ也あきの暮

16才 頓て去ぬ春やしきりに雨の降

六評通点之部

17ウ 見る物にうつりて秋の心かな

18才 やがて行春やしきりに雨の降

八評之部

19才 淋しさに戸もさ、ぬ也秋の暮

〈牧之〉

鳥明撰

2ウ 訳もなふ船乗まわす涼みかな

3才 後の月霜となるべき光り哉

蒼虬評

5才 白雲の裾引残す尾花かな

其堂評

8才 鼓子花や石にしみこむ馬の汗

8ウ 冬枯の軒端に近き野山哉

博和評

10才 初花やわれに後れて蝶一つ

10ウ 玉棚や秋の哀も此日より

坡仄撰

12ウ 行秋や蔓にすがれる蟬の殻

桃居選

15オ 暮る、まで日の有山やはつ桜

丈左撰

16ウ 山伏の衣は赤し麦の秋

六評通点之部

18ウ 雨の蝶垣越までの力かな

七評通点之部

19オ 涼しさや灯うごく水のうへ

右の里竹の句のうち「八評之部」に出る「淋しさに戸もさ、ぬ也秋の暮」は、十人の撰者のうち八人から上位勝番に選ばれたはずであるが、八千坊・坡仄・丈左撰の部に見えるのみで他には見えない。同様に、「六評通点之部」に出る「見る物にうつりて秋の心かな」の句も八千坊・其堂撰の部以外には見えず、「やがて行春やしきりに雨の降」の句も丈左撰に見えるのみである。これは何故かという、「通り点」の基準句数と『十評発句集』の掲載句数がずれているからであろう。つまり、『十評発句集』では各撰者上位二十五番までしか掲載されていないのであるが、「通り点」評価が例えば五十番までとか百番までであったと考えるとかような現象が起きることは十分にあり得る。「六評通点之部」「七評通点之部」に出る牧之の二句が十評の部に見えないのも同様の理由による。なお、収録句に徴するに季題は四季の自由

題。そこから考えると、この発句合は月並ではなく、臨時の興行であったと見てよい。

さて、次に興行圏である。重複句かつ「通点之部」も含め、『十評発句集』入選作者と入選句数を地域別に一覧表（P11参照）にしてみよう。

この表をもとに作者圏を整理してみると、越後各地が、長岡12名（句数計26句）、六日町11名（38句）、塩沢11名（53句）、見附6名（8句）、柏崎6名（9句）、竹の又5名（16句）、小千谷4名（11句）、目来田3名（15句）、堀之内3名（3句）、小出嶋3名（3句）、上野2名（4句）、黒川2名（2句）、下一日市2名（2句）、関2名（9句）、水沢2名（4句）、下条2名（2句）、山谷2名（4句）、中條2名（4句）、佐梨2名（2句）、出雲崎2名（3句）、仙田1名（4句）、馬場・宮村・繁山が各1名（各2句）、大崎・十日町・仙木・川口・片貝・関山・安養寺・小栗山・反田・千手・泉田・中嶋が各1名（各1句）、所属不明が2名（3句）で、合計103名243句。越後以外に目を転じてみると、武州が忍8名、羽生3名、蕨・鴻の巣・熊谷各2名の17名で合21句。上州が伊勢町5名、沼田2名、八崎・厩橋・荒牧・伊予久・ヒロ沢・硯田各1名の13名で合16句。信州七瀬が2名で合4句。東都が1名で2句。伊勢平治がやはり1名で2句。奥州会津が1名で1句。以上あわせて、34名46句となる。入選作者が合計137名、うち越後が103名であるからその割合は約75%。句数で言うと全289句のうち越後作者が243句で約84%となり、何れから見ても越後中心であることは

動かない。なお、そのことに関連して、この興行では東都宗匠として鳥明・其堂・杜春の三名が据えられているが、東都作者は一名のみ。同様に、坡仄の伊勢からも一名のみ。八千坊・桃居の浪花、蒼虬・丈左の京都、重厚の湖南、博和の讃州からは一名も入選していない。それは、この発句合興行のちらしが東都・伊勢・浪花・湖南・讃州辺りへは殆ど配布されなかったことを示している。このこともまた、この興行があくまでも地元中心であったことを示している。

一茶等「七評ちらし」

では、話を「一茶等発句合募句ちらし」に戻そう。なおこのちらしが伝える発句合興行は、一茶を含め撰者七名を据えてのそれ。『十評発句集』に倣って、以下の論中で「七評ちらし」と呼ぶことにする。次に句読点を付して釈文を示す。図Ⅱの板木・図Ⅳの拓本と照合して御覧いただきたい。

悠久山	ナカヲカ	悠久山	信州	音芳
白山宮	ニイカタ	白山宮	上州	乙人
多門天	ウラサ	多門天	雷村	雷村
		寄句一万二千吟		
		三字奉納額面		
		助補		

七評 芭蕉堂 蒼虬

越後 石海

田川 鶯笠 大黒庵 音淵

北洋

八巢 蕉雨 八日庵 万和

椿丘 太箒 誹諧字 一茶

四季乱題 料三拾八銅

右は一評より百吟跋。但シ景物之儀、巻頭・巻軸ノ御方へ縮上壺反ツ、二番より甘番迄流行七部集、三評通り吟ノ御方へ発句小鏡・誹諧小鏡、四評通り吟ノ御方へ芭蕉七部集、五評通り吟ノ御方へ火浣布名掛物軸、并誹諧十歌集、六評通り吟ノ御方へ縞袖壺反ツ、七評通り吟ノ御方へ上田縞壺反ツ、右之通り御座候。早々御入吟奉希上候。

四方 越後魚沼郡 世話人 守白

御社中諸雅 上田塩沢駅 紫胤

願主 白熊

まずは奉納先であるが、「三字奉納額面」とある三字（三寺院）は、次の三箇所。「ナカヲカ悠久山」は、現新潟県長岡市悠久町悠久山公園内にある蒼柴神社。ちなみに、板木では図Ⅲに示したように、「悠久」の部分が入木になっているが、これについては後に触れる。「ニイカタ白山宮」は、現新潟市中央区にある新潟総鎮守の白山神社である。ウラサ多門（聞）天」は、前述した『十評発句集』の奉納先でもあった現新潟県南魚沼市浦佐吉祥山普光寺の毘沙門堂。「奉納額

「面」は「秀逸句」を額に仕立てて奉納すること。ちらし中ほどに「四季乱題」とあるところによれば、この発句合も『十評発句集』と同様に月並ではなく、四季自由題による臨時の催しであったことが分かる。「料三拾八銅」とある点料は、おそらく四句一組のそれであろう。

「寄句一万二千吟」は、一万二千を目標に句を集める、意。撰者七名は一茶を含め錚々たる顔ぶれであること、言うまでもない。なお、一茶の庵号「俳諧寺」とあるべきところ、「寺」を「字」と誤る。「一評より百吟跋」とあるから、七名の選者が惣句にそれぞれに点をかけ、勝句百番を選ぶのである。その上位二名「巻頭・巻軸ノ御方へ」は「縮上壺反ツ、」が、さらに「二番より廿番迄」へは「流行七部集」が「景物」として与えられる。そして、先に『十評発句集』でも見たように、何人かの選者によって上位百番に重複して選ばれるケースも少なからず出てくるわけで、そちらにはまた別に

三評通り吟ノ御方へ発句小鏡・俳諧小鏡

四評通り吟ノ御方へ芭蕉七部集

五評通り吟ノ御方へ火流布名掛物軸・并俳諧十歌集

六評通り吟ノ御方へ縞袖壺反ツ、

七評通り吟ノ御方へ上田縞壺反ツ、

というように、景品が用意されている。なお、この景品のうち、「俳諧十歌集」とあるのは「俳諧十家類題集」であろう。「景物」として越後特産の縮織、信州特産の上田縞が見えるのも地方色が現れて興味深い。なお、「火流布名掛物軸」の「火流布」は、日本では平賀源内

がはじめて作ったといわれる石綿を麻苧に混ぜて織った燃えない布のことであるが、「名掛物軸」の意味を解しかねる。火流布仕立ての名品の掛け軸の意であろうか。

さて次に、この「七評ちらし」の作成年代はいつか。その一つの手掛かりは景品の中に見える「流行七部集」である。該書は小本二冊で、文政三年九月大阪河内屋源七郎ほか二軒刊。また、七名の撰者のうちもつとも早く没したのが一茶で、それは文政十年十一月十九日のこと。したがって、「七評ちらし」は文政三年九月から同十年十一月までの間に作成されたことになる。では、この「七評ちらし」の発句合興行を企画したのは誰か。ちらしによれば、世話人は越後魚沼郡上田塩沢駅の守白と紫胤である。願主の白熊には所書きが入らないが、おそらく同地塩沢の人であろう。もとよりこの三名が、七名の選者にわたりをつけるほどの力量があったとは思われず、そこにはやはり一茶の介在を考える必要がある。この詳細は省くが、「七評ちらし」に出る六名の選者は文政三年以前に一茶と直接的な交流があり、とりわけ太筈・鶯笠とは関わりが深い。この六名と一茶の親密度を示すものとして、次のような資料もある。それは矢羽勝幸氏稿「俳人番付からみた一茶」（同氏編『一茶の総合研究』に収録）に俳人番付Eとして図版入りで紹介された故宮田正信博士旧蔵（現奈良大学図書館蔵）の番付である。内容は、中央に「正風俳諧師座定／配団 京蒼虬・アヲミ 閑斎／勸進元／シナノ一茶」と大きく入れ、左右に六段に分けて俳人名を表示する。一般の俳人番付のような大関・関脇・小結・前頭と

いう位付けはないが、左方最上段の前頭上位相当位置に鶯笠・蕉雨が、また右方最上段小結相当位置に万和、続いて音淵・太箒と並ぶ。かような俳人番付がどのような手続きで作成されるのかは不明な点が多いが、この場合「勸進元」一茶が大きな役割を果たしていることは間違いない。つまり、その位付けには一茶との親疎が反映していると見られ、「七評ちらし」に出る六名が一茶の声がかりで揃ったことを傍証する資料ともなる。なお、矢羽氏はこの俳人番付について文政五・六年ごろの成立と判断しておられるが、それが「七評ちらし」の興行時期とほぼ重なることも注目しておきたい。次にちらしに「補助」として出る面々であるが、『一茶全集』（信濃毎日新聞社刊）によつて一茶の句稿・句文集・選集などに目を通してみると、上州の浦人、越後の石海が文政三年以前に一茶と関わりがあったことが知られる。すなわち、上州の浦人は『董艸』（文化七年刊）『志多良』（文化十年稿）『あとまつり』（文化十三年刊）『杖の竹』（文化十四年刊）にその句が収録され、『随斎筆記』書入れの文化十三年十二月・文政二年十月のあたりにも一茶は浦人の句を記録していて、文政三年以前からそれなりの交流があったことが知られる。また、「七評ちらし」興行との先後は定かではないが『たねおろし』（文政九年刊）にも浦人の名前は見える。なお『新撰俳諧年表』によれば、浦人は瀾亭と号し天保二年に没したとある。この「七評ちらし」発句合ととりわけ深い関わりを持つと見られるのもう一人の越後の石海である。石海は『俳文学大辞典』によれば、「本名、杉坂政右衛門。別号、白雲栖。越後国長岡

神田町の商人。生没年未詳。文政末ごろ没か。」とある。一茶との関わりで押さえてみると、『あとまつり』（文化十三年刊）『越後』の部に司風改五文・亀穴・路丈・竹里・幽嘯らと共に出たあと、『杖の竹』（文化十四年刊）「まちこ」の部にその名が見える。『随斎筆記』書入れでは、文政二年三月～七年正月にかけて越後各地（ラジャヤ・高田・出雲崎・魚沼郡上田・同飯山・長岡・見付）作者の句を多く書き留めるが、その冒頭部文政二年三月のあたりに石海の句が記録されている。これらによって、石海も文政三年以前に一茶とそこそ親密な交流を持っていたことが知られる。また『たねおろし』（文政九年刊）「三越」の部にもその名は見える。その一茶との関わりもさることながら、越後高田の石海について注目すべきは太箒との関わりであろう。文政七年九月の序を持つ『寂砂子集』は、文政六年七月から七年八月にかけて太箒の信濃・越後・出羽・陸奥行の紀行であるが、六年七月廿九日に柏原の一茶を訪ね五日間滞在したあと、八月廿五日には長岡に石海を訪れており、その折の様子を次のように記す。

信濃川は。千曲川。筑摩川ふたつの流の末にして、越後の国の洪河なり。廿五日、この川をわたりて長岡に着。まづ年頃文音のちなみある杉阪石海を訪ふに、かぎりなく悦び、やがて客舎を儲くるに、むさしの貞秀・越中の千崖も来りあはせて同宿す。それよりしては日々同社の人来とぶらひ、又は。千手。寺島。左近。撰多屋。小千谷教村の人の招くにうちまかせて行つ戻りつ、日数も既に百余日、かき捨し反古ども山をまなしつべし。この遊びに

世をも旅をも忘果て、俳仙窟なるべしと戯興す。

(俳書大系13による)

そしてさらに翌七年四月六日には、出羽・陸奥行の帰路に同地を再訪し、翌七日には「石海・霞江・春坡等にともなはれて、悠久山より西片貝の山寺に遊」んだりして、十日間ほど滞在している。太筈の石海との対面はこの折が初めてのように読めるが、「文音のちなみ」は「年頃」あったものらしい。この『寂砂子集』の伝える太筈の高田行は文政六年から七年にかけてのこと、一方「七評ちらし」の発句合興行は文政三年から十年までの間であった。この高田行の折に太筈が「七評ちらし」の奉納先の一つである悠久山を訪ねていることも何やらいわくありげではある。何れにせよ、その前後にはわかには決し難いが、一茶・石海・太筈の三者間に密な交流があったことは「七評ちらし」興行の企画と決して無関係ではあるまい。なお付け加えておけば、『寂砂子集』下巻夏の部には「七評ちらし」の「助補」の一人である上毛乙人の句も収録されている。やはり「助補」に名が見える越後の呉洋・北洋についてであるが、『新潟県史』(通史編5、近世三)によれば呉洋は柏崎の人で長浜氏、北洋は見附の人で渋谷氏とある。一茶関係の資料では、先にも触れた『随齋筆記』書入れの文政七年正月のあたりに北洋の句が記録されるが、「七評ちらし」興行との先後はやはり不明。呉洋の名は一茶関係の資料には見出すことは出来ないが、『十評発句集』に柏崎の所書きで二句入選していることは注目してよからう。また、一茶の藤元の信州で「助補」を務めた奇芳も一茶

の周辺に出て来ないが、この人も『十評発句集』に信州七瀬の所書きで一句入選した実績がある。

かように見てくると、「七評ちらし」発句合興行が企画される経緯がおぼろげながら見えて来るような気がする。往時の『十評発句集』またその後何回か催されたかも知れぬ同様の興行を念頭に、三寺院への奉納発句合を思いついたのは塩沢の守白・紫胤・白熊の三名であったことは間違いない。そこへ助補として加わったのが『十評発句集』にも参加した経験を持つ柏崎の呉洋・信州の奇芳、それに一茶・太筈と交流のあった高田の石海、一茶旧識の上州の浦人らの面々である。選者についてはおそらく石海あたりから一茶もしくは太筈に相談があり、一茶が鶯笠以下の六名に話を通じて実現の運びとなったと考えて特に違和感はない。

それにしてもこの「七評ちらし」の板木はどこで作られたのであろうか。古美術店のダンボールに詰め込まれていた数十枚の風絵を全て引き取っておけばその中から何らかの手掛かりが得られたかも知れないと今となつては悔やまれるのだが、願主・世話人が越後塩沢の人であること、それに表面の風絵も含めて板木の彫りがいかにも素人くさいことを考え合わせて、願主・世話人の周辺で作られたものを取り敢えず判断しておきたい。ちらしの配布範囲については、これも『十評発句集』の例を参考にすれば、鶯笠・蕉雨・太筈の活動圏である江戸、蒼虬の京都、奇淵・万和の大坂あたりには届けられることなく、越後・上州・信州辺を中心に配布されたのではないだろうか。その結

果がどのようになったのかは『十評発句集』に該当する入選句披露の冊子または摺物あるいは奉納額などが出てこない限り、何とも言えないが、次項で取り上げる一茶・石海両評奉額なども考え併せると、それなりの評判を呼んだのではないかと想像される。そのことと関連してもう一つ押さえておかねばならないのが、入木の問題である。先にも触れたように、「七評ちらし」板木の冒頭部「悠久」の部分が入木になっている(図Ⅲ)。一口に「入木」とは言ってもその様相は実に様々で、例えば板木の該当部分に木の節があつてそのままでは彫れない場合などに入木処理をしてこれを凌ぐこともある。この「悠久」の入木もその例と見られなくもないが、もう一つ考えられるのは奉納先の変更である。それはすなわち、「悠久」と入木される前にこの箇所には別の地名・寺社名が入っていた可能性もあるということである。先に筆者はちらしはその場限りのものと述べたが、興行が成功した場合、同じメンバーで奉納先を変えてもう一度ということとは十分にあり得る。その場合は板木全体を彫り直す必要はなく、一部に入木処理をすればそれで事が足りるわけで、この「七評ちらし」板木は、二度使用された可能性もあることを指摘しておきたい。

一茶・石海両評奉額句合

「七評ちらし」が伝える奉額句合と関連して見ておくべきものに、一茶・石海両評奉額句合がある。『新潟県史』(通史編5、近世三)には「文政十年片貝(小千谷市)の観音寺と浅原神社に掲げた俳額(一茶、石海評)には一万五〇〇〇句の応募があつた」と記す。『新潟県史』(資料編11、近世六)に、該当のものと思われる俳額(小千谷市観音寺所藏)・一茶の点帖(小千谷市山口太一郎氏所藏)・点が済んだことを伝える一茶書簡・点帖の一部見開きのカラー図版、それに俳額の翻刻を収録する。俳額は、冒頭に「奉納 惣連一万五百章/内秀逸二百吟」として百句を作者名入りで列記し、末尾に願主時幸の追加吟、それに評者一茶の法楽句「苦の娑婆やさくらが咲ばさいたとて」を添え、末尾に「文政丁亥仲秋」と入れる。因みに、この一茶の句は『梅塵本八番日記』に同句形で見え、また『浅黄空』には「大悲奉納」の前書きを添えて収録する。俳額には「惣連一万五百章」とあるので、通史編解説で「一万五〇〇〇句」とするのは誤りかと思われる。また、解説には一茶・石海両評で「片貝の観音寺と浅原神社に掲げた俳額」とあるのだが、資料編図版収録の俳額は一茶選の「秀逸二百吟」だけを見ても、石海の名はどこにもない。これは図版からは二十冊ほどと見える一茶点帖の一冊目の表紙に「正観世音奉納/花ノ巻卷一/一茶先生評」とあるところから推察するに、点帖には「花の巻」に対応する「月の巻」も一組あつたはずで、そちらが石海選の部だったので

ないか。つまり、この奉額発句合は一茶・石海両評で、両者がそれぞれに一万五百章の寄句に点をかけて、一茶選の「秀逸一百吟」は観音寺に、石海選の秀逸句は浅原神社に奉額されたのではないかと思われる。興行完了年次は、一茶書簡の日付が「八月一日」で、俳額の末尾に「文政丁亥仲秋」とあることから、一茶が没する三ヶ月ほど前の文政十年八月であったことが分かる。「七評ちらし」の興行よりはおそらく後のものであろう。俳額に見えるのは一万五百章から選抜された百句のみであるから投句者の一部に過ぎないのであろうが、その数は時幸を含め八十一名。地域別に整理してみると、観音寺と浅原神社の所在地である片貝を意味すると思われる「当所」が15名(句数計19句)、小千谷6名(11句)、濁沢5名(8句)、長岡(含、長岡千手・千手)4名(7句)、虫亀5名(5句)、塚の山4名(5句)、柏崎3名(3句)、小白倉2名(3句)、五辺・釜ヶ島・中田・油フが各2名2句、上保内・村松が各1名2句、泉新田・水原・会津大田・浦佐・目来田・山宿・村上・加茂・石上・高梨・サカイ・中ノ島・下関・上野・竹沢・加治・見附・法坂・桐沢・飯塚・須原・新潟が各1名1句、それに所属不明の4名各1句となる。『十評発句集』で最多入選を誇った目来田の里竹、それに『十評発句集』にも入選し「七評ちらし」にも関わった柏崎の呉洋も参加していることは注目してよからう。この一茶・石海両評奉額句合の存在は「七評ちらし」の興行がそれなりの盛況裡に終り、越後での一茶の評判が最晩年まで衰えなかったことを示すものであろう。

*この稿は平成二十一年度奈良大学研究助成に拠るものである。

平成二十二年九月一日稿

		十 評 発 句 集 作 者 圏											句 数 計	地 域 計				
地域	作者	撰者									通点の部							
		烏明	八千坊	蒼虬	重厚	其堂	博和	杜春	坡仄	桃居	丈左	6評			7評	8評	9評	
長岡	里明	1					1										2	26
長岡	峨山	1															1	
長岡	松竹	2															2	
長岡	暁雪	1					1			1							3	
長岡	松路		1														1	
長岡	柳夕				1						2						3	
長岡	太伝				1			2	1		1						5	
長岡	吐月					1											1	
長岡	喜三						1			2							3	
長岡	文正							1		1		1					3	
長岡	太音								1								1	
長岡	白童									1							1	
六日町	慮呂	1	1	1			1	1		1			1				7	
六日町	昌宇	1				1	2	1									5	
六日町	松居		2		2	1		1			2				1		9	
六日町	可周			1													1	
六日町	文里			1		1			3	1							6	
六日町	尚古			1	1			1			1						4	
六日町	其及			1													1	
六日町	椿台							1									1	
六日町	宜風									1							1	
六日町	如夢										1						1	
六日町	麦路										2						2	
塩沢	筭木	1		1													2	
塩沢	牧之	2		1		2	2		1	1	1	1	1				12	
塩沢	青宇	1	2	2	1										1		7	
塩沢	北川	1			1	1				1		1					5	
塩沢	牧水		1	1		1						1					4	
塩沢	芦笙				1			1		1							3	
塩沢	可榮				1	2						2					4	
塩沢	茂兮				1				1		1	1					4	
塩沢	志好					1	1	2	2			2					7	
塩沢	女梅宇						1										1	
塩沢	佳朝									1		1					2	
見附	其流	1		1								1					3	
見附	文溟				1												1	
見附	梨暁						1										1	
見附	梅天						1										1	
見附	霞柳						1										1	
見附	湖月											1					1	
柏崎	呉洋		1								1						2	
柏崎	千保			1		1											2	
柏崎	其貞			1	1												2	
柏崎	芦雪				1												1	
柏崎	斗石					1											1	
柏崎	虎雄											1					1	
竹の又	如竹	1					1				2						4	
竹の又	野草		1					1	1		1	1					5	
竹の又	古村			1		1			1			1					4	
竹の又	柳雨				1		1										2	
竹の又	竹水						1										1	
小千谷	旭宇		1		1						1						3	
小千谷	仲有		1		1												2	
小千谷	玉芝			1		1	1			1		1					4	
小千谷	里鶴								1								1	

目来田	里竹	1	2		1	2		1	1		2	2		1	13	
目来田	翁几	1									1				1	
目来田	芦月											1			1	15
堀之内	准龍					1									1	
堀之内	志道					1									1	
堀之内	素嵐									1					1	3
小出嶋	素風		1												1	
小出嶋	素良													1	1	
小出嶋	猪左					1									1	3
上野	龍因	2				1									3	
上野	柳雪					1									1	4
黒川	三峰	1													1	
黒川	藤栄								1						1	2
下一日市	尚水	1													1	
下一日市	謝日			1											1	2
関	野麦		1		1				2	1		1			6	
関	野牛				1			1	1						3	9
水沢	柏青		2												2	
水沢	敬之				1			1							2	4
下条	師乙		1												1	
下条	其雲									1					1	2
山谷	朝雨				2				1						3	
山谷	松里							1							1	4
中條	松声				1										1	
中條	匏舟				1					1		1			3	4
佐梨	梅甫					1									1	
佐梨	零笠							1							1	2
出雲崎	里仙							1			1				2	
出雲崎	百亀											1			1	3
仙田	二川		1		2						1				4	4
馬場	芦元		2												2	2
宮村	洞暁		1									1			2	2
繁山	柳生		1					1							2	2
大崎	友宁	1													1	1
十日町	霞雪										1				1	1
仙木	雨客		1												1	1
川口	楚練						1								1	1
片貝	孤峰							1							1	1
関山	杜園										1				1	1
安養寺	柳只								1						1	1
小栗山	自徑							1							1	1
反田	松砂									1					1	1
千手	一步											1			1	1
泉田	似声								1				1		1	1
中嶋	北季								1						1	1
?	桃溪			1											1	
?	徐涼						1			1					2	3
武州忍	年路	1													1	
武州忍	流之	1													1	
武州忍	巽山							1	1			1			3	
武州忍	図大							1							1	
武州忍	一知								1						1	
武州忍	露時雨									1					1	
武州忍	宗普									1					1	
武州忍	花暁											1			1	
武州蕨	和風	1													1	
武州蕨	承住										1				1	
武鴻の巢	仙風		1												1	
武鴻の巢	篁雨		1												1	

武熊谷	月樵			1		1					1				3	
武熊谷	寿六			1											1	
武州羽生	宋茂							1							1	
武州羽生	亀峰									1					1	
武州羽生	花英										1				1	21
上州伊勢町	一峨		1	1											2	
上州伊勢町	丹霞			1											1	
上州伊勢町	琴霞			1											1	
上州伊勢町	白之					1									1	
上州伊勢町	麦雨									1					1	
上州沼田	桑列					1						1			2	
上州沼田	書郊									1					1	
上州八崎	素亥							1				1			2	
上州厩橋	許友								1						1	
上州荒牧	吟水									1					1	
上州伊予久	鯢思										1				1	
上州ヒ口沢	旬竹										1				1	
上州硯田	一畦											1			1	16
信州七瀬	烏凌		1			1					1				3	
信州七瀬	寄芳								1						1	4
東都	如水							2							2	2
奥州会津	巨石	1													1	1
伊勢平治	嗽之							1			1				2	2



圖 I



圖 II

**Printing Blocks of "Shichihyô-chirashi" (Seven editors' pamphlet)
edited by Kobayashi Issa et ai.**

Kazuaki NAGAI